

ニューヨーク補習授業校

平成二十八(二〇一六)年度

卒業式特集号

2017年4月22日発行
56 Harrison Street
503 New Rochelle
NY 10801

平成二十八(二〇一六)年度卒業証書授与式

平成二十九年三月十二日(日)午前十時十五分から、ニューヨーク補習授業校の卒業証書授与式が、アルバート・レオナルド ミドルスクールで行われました。



式は厳粛な雰囲気の中で行われ、例年以上に素晴らしい卒業式となりました。

卒業生の皆さんは、緊張した中にも晴れやかで自信に満ちた表情で式に臨み、初等部五十七名、中等部十七名、高等部十四名、計八十八名が巣立っていきました。

ここに紹介する「送辞」「答辞」には、代表者の児童・生徒だけでなく、補習授業校に学ぶすべての子どもたちの、これまでに経験してきた様々な体験や苦勞、そして深い思いが凝縮されています。

楽しかったこと、苦しかったこと、そして悲しかったことなど、列席したすべての人が、その一言一言に共感し、時には涙をさそわれる場面もあり、会場は感動に包み込まれました。

今回の「卒業式特集号」を通して、補習授業校で育った児童・生徒の成長ぶりを改めて認識していただければ幸いです。

LI校初等部 6年1組	LI校初等部 6年2組	LI校中等部 3年	LI校高等部 2年	W校初等部 6年1組	W校初等部 6年2組	W校中等部 3年	W校高等部 2年
荒井 爽亜	アンドレン 安住	荒井 香乃亜	江川 葵	青木 さくら	赤峰 花里菜	ショベ 望明	阿部 紘子
福島 光	福岡 華蓮	飯田 稜	藤森 空	ベッカー アラン	コウエン セバスチャン	ギャグリアルディ 幸	安倍 野映
平野 恵理奈	市川 華	小浜 かれん	カイザー 嶺	コウエン グリアス	波多野 まなみ	ヘイズ ガイタノ	ショベ 志文
香月 萌依	ケンピナス 友弘	宮内 天	北川 澤那	フィッシャー ケイト	井上 陽香	保山 健人	岩佐 佳奈
松浦 旬兒	政岡 璃央	モンゴメリー フリックス	柴田 奈々枝	グレシャス 采紀	岸 皓介	フォング 小山 笑鈴	小野 元暉
ロジャー 海	錦織 健人	バブル 杏菜	豊田 真琴	橋本 爽汰	小高 咲来	クリーグ イザベル	鹿内 颯太
柳光 楓	小倉 真那	山口 茜	上野 絵里沙	ホーク 鈴音	クリーグ ハリソン	三井 大輝	武田 勇人
サンタクルス 陸	サリバン クリストファー 光博	山口 百音		石部 怜花	ランポート エイデン	永淵 華織	
滝田 智佳	桃原 ミア			金子 翔太	増田 大斗	トロッタ 藤坂 ソフィア	
テイラー 恵美	桃原 レイ			北野 雫	宮木 優芽		
ウォーリン 海	ウォーリン 太郎			水野 大直	西田 理沙子		
山崎 での那	山口 浩			佐藤 壮	小川 恵		
	山本 和史			鹿内 春伽	小澤 虎之介		
				田口 丈翔	佐々木 玲奈		
				富田 実	白倉 まや		
				若月 ワード 娃美利	鈴木 豪一		

今回、送辞を考えるにあたり、先輩方との一年間の思い出を振り返ってみました。そして、一番に思い出されるのは、この一年間は、高等部のみんなにとって、普通ではない補習校生活だったということです。

去年、先輩方が高一のとき、高等部全体で十五人くらいだったと思います。しかし、今年は私たち高一が十五人もいて、先輩方は去年との違いに戸惑ったこともあったと思います。今年は、色々なイベントで、普通、高等部みんなで分担する担当を、流れよく行われるように、高二が全て引き受けてくれました。あと一か月で私たちがそんな役をできるようになるのか、今、とても不安です。そして、先輩方は一体どのようにすべてを成功させてきたのでしょうか？

去年の四月、補習校の初日に気付いたことがありました。それは、今まで送辞や答辞で何度も聞いてきたような、「仲の良い高等部」には、初日からはならないということです。最初は、私たちの間には、まるで透明の壁があるようでした。高一と高二は、教室の反対側に座り、ほとんど話もしませんでした。さらに、どんなに学年が上がっても人数の多い私たちの学年は、ランチのとき、二つのテーブルにわかれ、そして高二はまた別のテーブルに、と三つのテーブルに分かれて座っていました。これは、どう考えても、「学年を超えて仲が良い」普通の高等部ではありません。しかし、私は、この壁はすぐに消えると信じていました。午後の授業が全部一緒の上、夏祭りや蚤の市などのイベントは、高等部が一丸となつて行うため、絆はすぐに深まると思っていました。

しかし、この考えは、また、私たちの学年の人数の多さのために覆されました。

六月に夏祭りの話し合いを始めたとき、私たち高一はゲームのアイデアなどを出しただけでした。夏祭りを成功させるために必要なルール決めや細かい準備は、全て先輩方がしてくれました。でも、その夏祭りで、初めて高一と高二が混ざって活動をしました。みんなで協力してスイカ割をしたことをよく覚えていています。

十一月の蚤の市では、やはりまた学年で別れました。高等部として二十二人で出し物をすることもできましたが、私たちが中二のとき、同じくらいの人数で一つの出し物をしたときの大変さを思い出し、高一と高二に分かれました。

高二は伝統のクレープ、そして高一は、私たちの学年のスペシャルともいえる、わらび餅を作りました。しかし、ベイクセルと雑貨屋は一緒だったので、みんなで協力することができました。そこで、先輩方の賑やかな雰囲気と社交的な人柄にふれ、やっと普通の高等部になれた気がしました。

そして、年が明け、一年の終わりになつて、いつもは気さくで賑やかな先輩方がどのようにしてこの一年間を成功させたのが、ようやくわかりました。イヤブックのプロフィールページやクラス写真を高一、高二に分かれて作りましたが、先輩方はするべきことはテキパキと仕上げていました。一方、高一は色々な問題があり、中々終わりませんでした。先輩方は、いつもは面白くて、くだらないことをしてみんなを笑わせてくれますが、やるべきことはいつもしっかりとできていましたね。

先輩方の自信のある態度、みんなを笑わせる楽しさ、そして人一倍の責任感のおかげで、私たち高等部は授業も楽しく受けることができ、イベントも成功させることができました。先輩方の楽しさと責任感のバランスの良さには、いつも感動しました。これから、補習校を卒業して新しい世界に出られても、常に周りの人を笑わせ、そのバランスの良さで、何でも乗り越えていかれることは間違いないと思います。この一年間、私たちを見守つて、来年へ向けての道しるべを示してください。くださった先輩方、ありがとうございます。

私たちは、先輩方を見習い、しっかり次の一年につなげてゆきたいと思っています。本当に今まで何から何までありがとうございます。

ご卒業おめでとう、ございます。

答辞(一)

補習校の七年間を振り返って
W校初等部卒業生代表 フィッシャー ケイト

私は幼児部から六年生まで、七年かけて補習校に通ってきました。この間に、たくさんの新しい人と出会い、大切な思い出ができました。

一番心に残っていることは、毎年の運動会です。最初の五年間は負け続きでしたが、でも、いつも楽しくて、結果は気になりませんでした。運動会の中では徒競走が一番楽しかったです。一位でも二位でも順位は何でもよかったです。走ること自体が面白くて大好きでした。一年生の時に、お母さんに赤白ぼうについているゴムをちゃんとあごの下にかけられるように言われたのに、私はそれがいやでゴムをぼ

うしの中に入れて、徒競走に出たら、走っている途中にぼうしが後ろに飛んでしまい、放送の人に「ああと、ぼうしが落ちてしまった、がんばれ！」と言われたことが今でも忘れられません。

また、私は毎年六年生のおどりを見て、「楽しそうだな、私もやってみたい。」と思っていました。今年、六年生になって、みんなの前でおどったら、少しきん張したけれど、やっぱり私が思っていた通り楽しかったです。

次に心に残っていることは、幼児部でのカレー作りです。そのカレーが、私が初めて作った料理で、今でも大好きな料理です。またこの日が、私が初めて玉ねぎを切った日にもなりました。包丁が玉ねぎの中に入ったしゅん間からなみだが出てきました。今も、玉ねぎを切る時は、水泳用のゴーグルをつけて切っています。そして、一番がんばったことは毎日の宿題です。実は、四年生の時に、担任の先生から質問をされた時、私は先生の言っていることが全く理解できなかったことがありました。その時私はすごくくやしくて、日本語の勉強をもっと真剣にやろうと、自分に約束をしたのです。

毎週、補習校から宿題が出て、現地校からも宿題が出ます。今年は現地校の中学校に入ってから、宿題の量がぐっと増えました。現地校の宿題に何時間もかかって、補習校の宿題が出来ない日もありました。冬になると、スポーツがあって、補習校から早退すると、その日の勉強が分からなくなって宿題をするのが大変でした。もういやになって、補習校なんかやめてしまいたい、と何度も思いました。でも、そんな時は四年生の時のくやしさを思い出して、またがんばろうと自分に言い聞かせました。今では続けて来て良かったと思っています。

補習校の七年間を振り返ってみると、いい思い出をたくさん作ったと思います。楽しいこともあったし、いやなこともあったけど、全部大切にしていきたいです。

最後に、これまで教えてくれた先生、そして、毎週宿題の分からないところを教えてくれたお母さん、本当にありがとうございました。中等部へ進むことに迷っていましたが、続けることに決めました。大変な事はたくさんあると思いますが、がんばって行こうと思っています。

答辞(三)

Ｌ―校初等部卒業生代表 サリバン クリストファー 光博

僕は、一歳半の時から姉の送迎に連れていかれて、補習校に通っていました。幼児部でランドセルに憧れていた事を今でも覚えていてます。その時には、この日が来るなんて思いもしませんでした。今日ここに立ててとても光栄です。

幼児部から補習校に通っていたのを支えてくれたのは、母と父です。毎週送迎をしてくれ、いつも宿題の事を気にしてくれました。泣きながら宿題や作文をした金曜の夜は数えきれないほどありました。でもその日々があったからこそ、今日があります。何と言っても、補習校に通わせてくれた事に感謝しています。全て、父と母のおかげです。

補習校の楽しみは運動会、秋祭り、そして餅つき大会など様々な行事があります。それを可能にできるのは、お父さん方やお母さん方のおかげです。一つ一つの思い出が毎年沢山できました。安全当番や係のミーティングに来ているお母さん達やお父さん達が廊下に行ったりして、学校にいても安心して過ごせました。特に、知り合いや友達のお母さんを学校で見かけると嬉しい気持ちになりました。親から子供へ、バイリンガルに育てたい気持ちがあるからこそ、子供達は頑張れます。お父さん達とお母さん達は、建物の柱みたいに僕たちを支えてくれています。みんなのお父さん、お母さん、ありがとうございます。

そして、未来のバイリンガルを育ててくれる先生方、毎週補習校の授業の準備をしてくれ、朝早く学校に来て、黒板や壁にきまりを貼り、土曜の朝なのにとても早く早起きをしないといけないかったです。生徒一人一人の事を気にかけて、ちゃんと日本語で授業が伝わるように努力をしてくれ、またユーモアを取り入れわかりやすくして、ときには、真心を込めて叱ってくれました。六年生、みんなを代表し、ここでありがとうを言います。

六年間、僕たちを応援してくれてどうもありがとうございました。最後に、共に勉強したり、笑ったりした六年生のみんな、どうもありがとう。

補習校は僕の人生の一部です。

ここからも頑張ってください。

毎週土曜日の朝、頭上の目覚し時計が鳴り響く中、眠い目をこすりながらベッドからはいだして当日の漢字テストの勉強を必死にやったのは、僕だけでしょか。金曜日の夜に次の日の宿題を全て、遅くまで起きて終わらせたことはあるでしょうか。こんな辛い思いをしながら何と僕は補習校に九年間も通い続けてきました。よく考えたら、それは、僕の人生の大体三分の二にあたるのです。こんなに長い間、補習校に通学していたなんて、振り返れば長かったなあと思います。でも、不思議なことに短かった様にも思えます。それは、嫌な思い出の百倍、得たことや楽しかったことも多かったからです。

まず、補習校に通うことによつて、日本の伝統文化と現代文化、そして、日本人の考え方を知ることができました。例えば、お正月のお祝いで餅つきをしたり、伝統的な遊びを教えてもらったりしました。毎年行われる書き初めの授業や百人一首大会では、昔の人が使っていた道具や言葉で歌われた歌を普通に現代人が楽しんでいることにも驚きました。僕にとっては、国民全員が、必ず祝う祝祭の期間があることが驚きでした。でもそれは嬉しい驚きでした。外国に住んでいる僕たちも含めて皆が、昔からの伝統で一つに結ばれているような気がしたからです。日本人が自国の歴史や文化に誇りを持ち、祖先を尊敬していることが分かりました。

次に、補習校では、日本語を学ぶだけではなく、現地校で習っている教科の復習や現地校で勉強した事をさらに深く学ぶこともできました。それによつて、もっと難しい問題を解けるようになりました。特に数学は、現地校の予習や復習となつて、とても助かりました。国語もずっと勉強してきたので、大学入学予備試験の外国語で、日本語を選択して試験を受けることが出来ました。すると、非常に良い成績だったので、びっくりしました。それは三分の二を補習校に費やした自分の人生が少し楽しくなる瞬間でもありました。

それから、補習校の友達ととても良い思い出を作ることが出来ました。忘れられないのは、皆が団結して、のみの市を成功させたことです。のみの市では、自分たちで企画して作った食べ物や具を売りました。今年はお素麺を売りました。のみの市が終わるころにまだ麺や具などが残っていたので、なるべく食べ物が無駄にならないようにする為に、一つ一つの注文を、具が零れ落ちるほど大盛りにし、

先生方などに押し売りしてきました。それまでの僕の物売りの経験は、自分の家の前でのレモネード売りだけでした。それも、あまり良い思い出がなかったもので、初めてののみの市のときは、うまくいくのだろうかと内心ドキドキしたものでした。ところが、これは嬉しい誤算ですが、のみの市では毎年全部売り切ることが出来ました。もちろん、最後売れ残りそうになると、先生方に大盛を買っていただきましたが。それでも一生懸命にみんな一つ目標を立てて努力したので、その結果が出た時は、とても嬉しく誇らしく思いました。

これらの経験から僕が得たものの中で、僕が一番大切だと思ったのは、それぞれの民族には、文化や伝統があるということです。それを知ることが、その人々の考え方や、ものの理解の仕方を知ることです。この考えを持つことによつて周りのアメリカの人達に対する僕の考えも深まりました。アメリカは、移民の国なので、一つの伝統や一つの文化はありません。でも、一人一人は、僕と同じように自分たちの伝統や文化からくる考えを持っています。これからも、この経験を生かして人に接していきたいと思えます。そして、補習校の九年間で、得たおもてなしの心や団結心を忘れずに、頑張っていこうと思えます。

最後になりましたが、僕や僕の友達たちが、日本語を学ぶ事で、将来よりたくさんの道が開けて行くことに気づかせてくれた先生方、本当にお世話になり、どうもありがとうございました。そして毎回、送り迎えしたり、いろいろなことに協力したりしてくれた両親にも心から感謝しています。

答辞(七)

「扉の向こうにあるもの……」

目を閉じて想像してください。家にいる自分、そして扉の向こうの一步先の世界です。暗いトンネルの向こうに何が見えるでしょうか。

「もう卒業なんだから部屋を片付けなさいと言われてしゅぶ部屋のクローゼットを整理した。分厚いフォルダーや箱の中には、昔の写真がたくさんあり、つい時間を忘れて見入ってしまった。そこには、今より半分くらい背の私がいる。細胞はかなり入れ替わっているかもしれない。けれど、生まれてからずっと、と切れることなく連続している存在なのだ。」

「思い出」の箱の中には、昔の「お知らせ」が入っていた。「控えめな性格で手をほとんど上げないが」と書いてある。確かに目立つことが好きでなく、小学校でも窓から空を見て暇つぶしをしていたこともある。今も目立つのは好きではないけれど、少しづつ自分の殻が破れて、新しい世界が広がっているように感じる。

振り返ると、自分の何かが変化するきっかけがあった。昨年、現地校の中学の卒業生代表として大勢の人の前でスピーチをすることになったのだ。当日、大きく息を吸った。すると落ち着いた気持ちでスピーチでき、緊張しなかった。いつの間にか、恥ずかしいという気持ちを克服していたのだ。年中から十一年間補習校をほぼ休まず通い続けたことも、自信になっていたのか、私の背中を押してくれた。

昨年の九月に私は現地校の高校生になった。自分の殻が開く、もう一つのきっかけは、ボランティアのクラブに入ったことだ。

ある時、シニアの話相手をする仕事を申し込んだ。友達とペアになり、ドキドキしながら、アッパーウエストに住む一人暮らしのおばあちゃんを訪ねた。以前はニューヨークのCBSのディレクターをしていたそうだ。キャビネットには良く知ってるニュースキャスターとの写真があった。おばあちゃんは「日本語が出来るのね。すごいね。これからは外に出て、いろんな世界を見て、ごらん」と優しいまなざしで言ってくれた。

高校では、思いもかけず、日本に興味がある学生がたくさんいた。日本のことを聞かれる機会もたくさんあった。それをきっかけに友達がぐんと増えた。補習校に通ってたからこそ、はやりのものや日本の習慣などについて話すことができた。現地校の新しい友達が、日本語の文をチェックしてと頼んでくる。逆に日本の友達ともラインで、時々、受験英語の手伝いをしている。クロスカルチャーの中で少し役に立てると嬉しくなった。

言葉は、武器だ。それは、決して人を傷つけない。それは、人をつなげるものだ。磨けばさらに光る道具だ。同時に大切なものは、ほんの少しの「勇氣」である。人間はみな同じだ。十五歳の私でも八十歳のニューヨーカーのおばあちゃんと心を通わせる瞬間がある。それには、「一歩、安全な自分の世界を出る勇氣と好奇心」がいる。どんなに言葉ができて、人と交わらなければ、生きたものにはならない。

アメリカで生まれ育って日本に住んだことがなくても、人生の三分の二、補習校に通ったおかげで私の中には、確実に日本が存在している。そのことは、一つの

心の柱となって、私の人生に生かされている。現地校との両立で苦しいこともあったけれど、乗り越えてこられたのは、担任の上田先生をはじめ、先生方が愛情をもって励ましてくれたのと、仲間たちの存在、そして家族の応援が常にあったからだ。支えてくれた周りの人たちに感謝の心を忘れず、これからも世界を広げて、社会の中で少しでも人の役に立つようなことをしたいと思っている。

将来の方向性はまだ分からない。けれど、外に出て、人と関わることで人生は輝くと思う。扉の向こうは嵐の夜もあるだろう。すみ渡った空が広がっているかもしれない。それを探すのは私の役目である。これからの長いジャーニー、希望をもって探していきたいと思っている。

答辞（く）

W校高等部卒業生代表 小野元暉

暖冬が桜の季節と入れ替わる時期になった今日（こんにち）、私たち卒業生に素晴らしい卒業式を開いていただいたことを心より感謝の意を表したいと思います。この式典にご出席下さった来賓の方々、関係者、そして保護者の皆様、誠にありがとうございます。

十二年前、当時五歳だった僕は初めて補習校へ足を踏み入れました。最初は何か何だかわからず戸惑ったものです。それから今日までの道のりは決して楽ではありませんでした。現地校と同時にもう一つの学校をこなさないとけないのは本当に大変でした。「なぜ補習校に通っているのだろう？」と悩んだことも多くありました。これらを乗り越えて今、僕はこの日を迎えることができました。僕の補習校生活は楽ではありませんでしたが、同時に最高の思い出です。

しかし、今日ここで伝えたいことは自分の体験話や思い出ではありません。「なぜ補習校に通うのだろう」という問いへの自分の答えを述べることで答辞とさせていただきます。

本日、ここに集まった皆さんは祖国、日本から遠く離れています。しかし、今ここで日本の卒業式に参加して下さっています。そう、アメリカという異国で、全く別の国の伝統を実現しています。これは一つの奇跡だと思えます。

この奇跡を可能にしたのが補習校です。アメリカで日本の文化が生き続け、次の世代にしっかり伝わっています。何千年も前から続く伝統を守っています。例えば僕たちは日本語を話し、和食を食べ、日本人として物事を考えています。

補習校は、日本人であることの意味を長い時間をかけて、僕らに教えてくれました。

この補習校があるからこそ、今の自分があります。この学校のおかげで百人一首や運動会などといった日本の行事に触れ合うことができました。今日ここで答辞を読めるほど日本語が上達しました。そして何よりも、遠く離れた日本を経験させてくれました。そう、補習校とはただ国語や数学、歴史などを学ぶ場所ではなく、そこに通う生徒たちにとっては、小さな「日本」なのです。

もし補習校に通わなかったら、今頃、僕は自分を「Japanese American」、日系アメリカ人と名乗っているだろうと思います。日本の血筋を持つが、アメリカ人ということ。しかし、僕は自分を日本人であると思っています。日本には一年間も暮らしたことがないのにアメリカ人ではなく、日本人と名乗っています。それは日本の文化や言葉に触れ、それが日々心に染みこみ、刻まれていったからです。この学校は僕の「日本人」というアイデンティティーを築いてくれました。

「なぜ補習校に通うのだろう。」僕にとって答えは明白です。私達は日本人だからです。これから先も日本人として、ありたいから補習校に通うのです。国の伝統と言葉を次の世代に託すためといえるでしょう。

僕たち卒業生は、日本の良さをこれから先も伝え続けていく使命を受け継いだのだと思います。これからアメリカに残る人、日本へ帰る人、また外国に行く人など、僕らが歩む人生は様々な方向へ向かっていくことでしょう。しかし、どこへ行っても、誰であろうとも、この補習校、その先生方、そこから授かった「日本」の心があり続ける限り、私達は託された使命を果たしていくことでしょう。

そしてこれから先、今度は私達が受け継いだ、「日本」を次の世代に託す時がやってきます。その時は、この補習校で身につけたことを、彼らに伝えていくことになりま。そうすることで必ず、私たちが地球上のどこにしようとも日本の心は生き続けると確信しています。

僕たちはこれから社会への第一歩を踏み出そうとしています。補習校に通うことによって、その社会を日本人として航海することができるようです。ここに集まった卒業生達は皆、一人一人、輝かしい未来が待っています。しかし、その未来とは自分の手で掴まなければ現実にはならないのです。

僕は今日一緒に巣立っていく仲間たちにこう言いたいと思います。我々の時が来たのだ。さあ、その未来を掴み取り、日本人として、世界に羽ばたこうではないか。

答辞 (VI)

――校高等部卒業生代表

カイザー嶺

この壇上から見える景色。二年前ここに立った時とはあまり変わらない。しかし、あの時と今の僕の心象風景はだいぶ違う。中学卒業は確かに祝うべき出来事だったが、二年前は大して嬉しくはなかった。卒業証書をもらったけれど、何週間後には、また高校生として補習校に戻ってきたま。でも、今回はこれで終わる。そう、補習校という長い旅も最後を迎えている。

最初はただ勉強が増えるだけの場所だと思っていた補習校だが、そんな場所を離れることを、これほど悲しく感じるなんて思いもしなかった。卒業が近づくにつれて、これから空く土曜日をどう過ごせばいいのか考えることが増えてきた。そして同時に十三年間もの歳月の重みを今、僕は感じている。

人は他との関係を糧に成長するものだと思う。この十三年間、授業についていけなくて辞めた子、親に辞めさせられた子、日本に帰った子など沢山の友人たちが補習校を離れていった。せつなく仲良くなったと思った友人たちは、次の年にはいなくなっていた。僕はうなだれた。ふりだしに戻り、また始めから、残った子たちとの友人関係を築いていかななくてはならなかった。社交性に乏しかった僕だったが、ただクラスが一緒なだけだと思っていた友達とも会話するようになり、また、新たな関係が築かれた。その繰り返しで、人間関係を築き上げる難しさも喜びも学んできた。随分、僕は成長したと思う。

結局、高二まで残ったのは七人だけだった。この仲間との長すぎるともいえる付き合いから、壊しようのない深い絆が生まれたと気付いたのは高校生になってからだろうか。いつの間にか仲間は、一週間に一度しか会わないけれど、何でも話せる最高のチームになっていた。

振り返ると、思い出はいくつも浮かんでくる。

「こんなに長く通ってきたんだから、大丈夫だよ。」とみんなに背中を押され、なかば押し付けられたような生徒会長の座。だが、そう甘くはなかった。運動会や秋祭りといった行事の計画を立てることは、それまで全て先輩たちにお任せだったが、今度は僕がどう行事を取り仕切っていくか決める番になった。

幼いころから恥ずかしがり引込み思案だった僕は、最初は不安しかなかった。中高全体を仕切る役が務まるとは、到底考えられなかった。しかし、これが杞憂だと分かったのは、生徒会長よりも生徒会長らしい女子たちに支えられた

からだ。皆の意見をまとめ、企画を進行し、実行の段取りをつけてくれた。僕は、ただ「よきにはからえ！」と見守るだけでよかった。

そんな経験から、僕はチームの理想像を見た気がした。深く結ばれた仲間とは、間違いをフォローしあい、足りなさを補い合い、全体でひとつになるチームのことだ。僕はこの仲間で作り上げたチームと十三年間積み重ねられてきた思いや経験を深く胸にこれからも生きていくだろう。

共に支え合い、成長を遂げたこの仲間の大切さ。僕が、十三年間という歳月をかけて補習校のみんなと築いてきた関係は、毎日会う現地校の同級生とは全く違う貴重なものだ。

今、僕の心にあるのは「喜び」「切なさ」そして「感謝」の気持ちだ。支えてくれた仲間への感謝の気持ちは言葉では表せきれない。また、毎週、送り迎えをしてくれたお父さん、帰りを楽しみに待ってくれたお母さん、そして先生方。一人だけで歩くのは到底無理だったこの十三年の道のりを陰でずっと支え、見守ってくれた。そのお陰で、僕は無事に「補習校」という一章を終える事ができる。

僕は今、大好きになった補習校を次の世代に託し卒業する。この十三年間の歳月を糧として、これからさらに成長してゆくことをここに誓う。

ありがとうございました。